



わたしたち文化人類学者は、フィールドで出会った人々によって語られるナラティブ(語り)を重視してきた。参与観察によるデータに加え、こうしたナラティブの収集や編集を通じて民族誌を生み出してきた。しかし、民族誌記述には大きく二つの問題が認められる。ひとつは、言語化されない(できない)経験をめぐるとの問題である。このため、人類学者がデータを集める際にナラティブに偏りすぎると、本当に重要なことを看過することになるかもしれない。もうひとつは、フィールドで出会う断片的な語りを編集することで、新たなナラティブを作り上げてしまうという問題である。それは時には社会的に影響のあるマスターナラティブとなり、フィールドでの語りに影響を与えてしまいかねない。本企画では、人類学者がナラティブを編むことの功罪、あるいは言語化されてこなかった、あるいはできなかったことがらを人類学でどのように扱うべきかを主たる問題意識とし、医療人類学におけるナラティブの可能性と限界について検討したい。

シンポジウム 医療人類学にとってナラティブとは何か？

【プログラム】

司会:田中雅一(京都大学)、澤野美智子(立命館大学)

10:00-10:05 開会挨拶、趣旨説明

10:05-11:05 ・磯野真穂(国際医療福祉大学)

発表1

「物語を相対化すること、ない物語を描くこと～拒食と過食、循環器疾患のフィールドワークを通じて」

11:05-12:05 ・浮ヶ谷幸代(相模女子大学)

発表2

「見る・聴く・たたく・交わすー北海道浦河ひがし町診療所ナイトケア「音楽の時間」から」

13:00-14:00 ・新ヶ江章友(大阪市立大学)

発表3

「性にまつわる「語られなかった物語」ーHIV陽性者の語りをめぐる分析から」

14:00-15:00 ・皆藤章(京都大学)

発表4

「心理療法における「聴き書き」をめぐって」

15:00-15:30 ・コメント 星野晋(山口大学)、
田中雅一(京都大学)

15:40-17:00 ・総合討論、閉会挨拶

【日時】

2017年2月4日(土)

10:00 ~ 17:00

【場所】

京都大学人文科学研究所
4F 大会議室

▽会場へのアクセス(京都大学吉田キャンパス本部構内)



企画:澤野美智子、田中雅一

参加費無料、事前申込不要。問い合わせ先:sawano@fc.ritsumeai.ac.jp (澤野)